

# No Museum, No Life?—これからの美術館事典 国立美術館コレクションによる展覧会

2015年6月16日（火）～9月13日（日）  
東京国立近代美術館



トーマス・シュトゥールト《ルーヴル美術館4、パリ1989》1989年、タイプCプリント、138.0×177.0cm、京都国立近代美術館 ©Thomas Struth

- 「名画を鑑賞する人たち・・・これもアート？」
- 「なぜ、美術館のなかはやたらと寒いのか？」
- 「作品はどんなふうに保管されていて、どんなふうに運ばれるの？」
- 「裸体ってアートなの？」

何気なく感じている美術館に関する素朴な疑問って意外にあるものです。今回はまるで事典をひもとくようにAからZまでの36のキーワードにそって、作品はもちろん美術館の設備や活動、そこに集う人々まで多面的に美術館そのものをご紹介します。そして素晴らしい作品を鑑賞いただきながら、皆さんの疑問にもお答えします。

また本展は国立美術館5館の合同展でもあり、日本のナショナルミュージアムである5館の所蔵作品の中から厳選した幅広い作品約170点を展示します。

いつもとは一味違った趣向で美術館初心者から上級者まで幅広く楽しんでいただける、知的好奇心を刺激するとともに新しい美術体験をお届けする展覧会です。

## 本展の特徴

- 美術館そのものをテーマに、事典に見立てたAからZまでの36のキーワードで構成
- 日本のナショナルミュージアムである国立美術館5館（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）のコレクションから約170点を展示
- 工夫を凝らした展示空間。構成はトラフ建築設計事務所、グラフィック・デザインは刈谷悠三
- 多彩な関連イベントを開催

## 開催の趣旨

今回の展覧会は、いつもと趣向を変えて**美術館そのものをテーマ**にしています。美術館という空間には素朴な疑問がいろいろあるものの、作品が主役であるため美術館そのものに目を向けることはあまり多くないのではないでしょうか。

しかし、美術館の構造や設備、作品の保管や運搬、展示、解説、そしてそれにかかわる多くの人々……、そこには様々なストーリーがあります。今回はそれらにスポットを当て、**事典に見立てたAからZまでの36のキーワード**にそって紹介していきます。

また今回の展覧会は、**国立美術館5館**（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）の**合同展**であり、2010年の「陰翳礼讃」展（国立新美術館）に続く合同展第2弾です。

日本のナショナルミュージアムである5館の所蔵作品は、紀元前から現代、西洋から東洋、絵画から写真、彫刻といった実に幅広い種類のコレクションであり、一人でも多くの方に見ていただきたい国の芸術財産です。今回はいつもと違った切り口で、それらの中から厳選したルノワール、ロダン、マルセル・デュシャンや岸田劉生など、**約170点**もの作品をご紹介します。

本展では、作品を楽しむことはもちろん、作品にとっての舞台である美術館にも目を向けることで展覧会を楽しむ新しい視点をご提案します。まるで美術館をテーマにした巨大な事典の中を歩くような展示空間を体感いただけます。「No Museum, No Life?」というタイトルには、美術館を楽しむことで人生が豊かになることと、過去の作品を未来へと守り続けていく美術館が持つ役割を込めました。

作品が持つ高い芸術性はもちろん、そこに新しい楽しみ方を掛け合わせることで、美術館初心者から上級者までがそれぞれの目線で楽しめる展覧会を提案します。いつもとは一味違った趣向で**知的好奇心**を刺激するとともに、**新しい美術体験**をお届けします。



ピエール＝オーギュスト・ルノワール《横たわる浴女》1906年、油彩・キャンバス、54.8×65.0cm、国立西洋美術館

## 本展の見どころ

■美術館そのものをテーマに、事典に見立てたAからZまでの36のキーワードで構成

■日本のナショナルミュージアムである国立美術館5館のコレクションから約170点を展示

まるで事典をひもとくように36のキーワードにそって作品を紹介していきます。作品は国立美術館5館のコレクションから厳選した様々な時代や分野の約170点を展示。そのほか美術館にまつわる資料や備品も展示し、これまでとは一味違った趣向で楽しんでいただける構成です。

**A** 「artist」アーティスト【アーティスト】  
制作者のこと。美術館が美術作品を集め、展示したり保存したりする場所だとすれば、それを生み出す制作者は美術館に先立つ存在である。ここではアンリ・ルソーの絵画や森村泰昌の写真作品など、古今東西の作家のイメージを紹介する。



森村泰昌《フェルメール研究〈3人の位置〉》2005年、カラー写真、44.5×76.0cm、国立国際美術館  
©Morimura Yasumasa



アンリ・ルソー  
《第22回アンデパンダン展に参加するよう芸術家達を導く自由の女神》  
1905-06年、油彩・キャンバス、175.0×118.0cm、東京国立近代美術館

**B** 「beholder」観者【かんじゃ】  
観る者。とくに美術作品を観る／見る者を指す美術用語。類似する語に「鑑賞者」(viewer)や「観客」(spectator)、「観察者」(observer)などがある。この項目では見る者が、作品のなかでどのように表象されてきたかを、古典絵画から現代美術の作品を含めて紹介する。ルーヴル美術館における「観者」の姿を捉えたトーマス・シュトゥルートの写真作品はここに展示される。

**C** 「catalogue」カタログ 「collection」収集 「conservation」保存修復 「curation」キュレーション

**D** 「discussion」議論

**E** 「earthquake」地震 「education」教育 「event」イベント 「exhibition」展示

**F** 「frame」額／枠【がく／わく】  
絵画や版画、写真作品を入れ、壁などに固定するもの。展示のためだけではなく、作品を保護する用途もある。さらに額は、それが取り囲むものが作品であること、つまり鑑賞対象であることを示す美学的機能も持っている。ここではこのように二重の意味を持つ額／枠を、16世紀の西洋の版画、岸田劉生などの近代日本の洋画、さらに戦後アメリカの作家フランク・ステラの絵画などを通じて紹介する。



岸田劉生《麗子肖像（麗子五歳之像）》1918年、油彩・キャンバス、45.3×38.0cm、東京国立近代美術館



G 「guard」 保護／警備

H 「handling」 取り扱い 「hanging」 吊ること 「haptic」 触覚的

I 「internet」 インターネット

J 「journalism」 ジャーナリズム

L 「light」 光／照明【ひかり／しょうめい】  
 絵画のなかで、見る者が注意を向けるべき対象に、描かれた光は向けられている。そして展示空間において壁に掛けられた作品は照明器具によって照らされ、そのことによってそれが見るべき作品であることが示されている。このように光は、光に包まれた対象がある一定の空間における主役であることを表している。とすれば展示空間を照らし出すダン・フレイヴィンの蛍光灯の作品では、経験すべき対象は私たちを取り巻く空間である。



ダン・フレイヴィン《無題（親愛なるマーゴ）》1986年、黄色蛍光灯、ピンク蛍光灯、244.0×41.0×20.5cm、国立国際美術館 ©Stephen Flavin / ARS, New York / JASPAR, Tokyo E1582

M 「money」 お金

N 「naked / nude」 裸体／ヌード

O 「original」 独創的／原物【どくそうてき／げんぶつ】  
 独創的であること。これはアーティストの要件であるように思われる。そしてそれによって生み出されたものが、唯一無二の原物として作品と呼ばれる。それでは以下の事物は、オリジナルと言えるのだろうか？たとえば誰かの作品の模写。あるいは版画やシルクスクリーンなど複製可能な作品。マルセル・デュシャンは、本物の男性用小便器を《泉》と題した作品として展示空間に置いた。彼の作品は「オリジナル」なのだろうか？



マルセル・デュシャン《泉》1917年（1964年、シュヴァルツ版 ed. 6/8）、小便器（磁器）・手を加えたレディメイド、36.0×48.0×61.0cm、京都国立近代美術館 ©Succession Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1582

P 「plinth」 台座【だいざ】  
 ものを載せる台のこと。台は舞台である。舞台上に載せられることで、ある事物は、作品として認識される。近現代彫刻の歴史において、彫刻を作品として成り立たせる台座と、彫刻作品との関係は常に彫刻家の悩みの種であり続けた。ここでは近代彫刻の父ロダンの《考える人》から、現代彫刻家のシュテファン・バルケンホルの木彫作品などを通じて、彫刻と台座の関係性を考える。



オーギュスト・ロダン《考える人》1880年、ブロンズ、71.5×45.0×60.0cm、国立西洋美術館 松方コレクション Photo：上野則宏

「provenance」 来歴【らいれき】  
 ものごとの由来。作品はさまざまな経緯から美術館に収蔵されている。来歴によって、作品の真贋や価値がはかられることもある。今回は近代日本の洋画界を代表する梅原龍三郎のかつての所有物に焦点を当てる。彼は自身の作品を東京国立近代美術館に、ルノワールの絵画など、自身が所有していた西洋美術の作品を国立西洋美術館に、そして工芸作品や京都に由来するものを京都国立近代美術館にそれぞれ寄贈した。本展では、それらの一部が再び一堂に会する。

R 「record」 記録 「research」 調査／研究

S 「storage」 収蔵庫

T 「tear」 裂け目 「temperature」 温度

W 「wrap」 梱包

X 「x-ray」 エックス線

Y 「you」 あなた

Z 「zero」 ゼロ

## ■工夫を凝らした展示空間。構成はトラフ建築設計事務所、グラフィック・デザインは刈谷悠三

会場にも工夫を凝らし、まるで美術館をテーマにした巨大な事典の中を歩くような感覚が味わえる展示空間を創り上げました。会場構成はトラフ建築設計事務所、グラフィック・デザインは建築設計事務所アトリエ・ワンに在籍したこともあるデザイナー neucitora 刈谷悠三さんです。



©2015 TORAFU ARCHITECTS

### トラフ建築設計事務所

鈴野浩一（すずの こういち）と禿真哉（かむろ しんや）により 2004 年に設立。建築の設計をはじめ、ショップのインテリアデザイン、展覧会の会場構成、プロダクトデザイン、空間インスタレーションやムービー制作への参加など多岐に渡り、建築的な思考をベースに取り組んでいる。2012 年、「空気の器」でレッド・ドット・デザイン賞受賞の他、受賞多数。2014-15 年に当館で開催された「高松次郎ミステリーズ」では展覧会の会場構成を担当。展覧会場を一望できるステージや、高松次郎の代表的作品である「影」シリーズのエッセンスを体験できる「影ラボ」など、来館者をわくわくさせつつも、展覧会への深い理解を促してくれる仕掛けを作り上げた。今回は、本展のコンセプトである「事典」をキーワードにした会場づくりを手がける。

### neucitora 刈谷悠三（かりや ゆうぞう）

1979 年、東京生まれ。東京工業大学大学院建築学専攻（塚本由晴研究室研究生）、建築設計事務所アトリエ・ワン、グラフィックデザイナー・秋山伸主宰の schtütcco を経て、2010 年よりデザイン事務所 neucitora を主宰。グラフィックデザイナー。建築や美術関連の書籍等のエディトリアルデザインの他、ロゴデザイン、サイン計画などを手がける。建築出身らしく、本展のコンセプトを視覚化した会場グラフィックや印刷物を展開する。

## ■多彩な関連イベントを開催

### ギャラリートーク

榊田倫広（東京国立近代美術館研究員・本展企画者）、新藤淳（国立西洋美術館研究員・本展企画者）

2015 年 6 月 26 日（金） 18：00—19：30

2015 年 7 月 11 日（土） 14：00—15：30

2015 年 8 月 28 日（金） 18：00—19：30

場所：1 階企画展ギャラリー

\* 申込不要、要観覧券

### MOMAT サマーフェス（仮称）

2015 年 7 月 31 日（金）～8 月 2 日（日）

夏の週末に美術館を楽しんでいただく特別イベント。シンポジウムのほか、美術館前庭での映画上映会や飲食のご提供など、いつもの美術館とは一味違ったイベントを予定しています。詳細は後日お知らせします。

## 開催概要

タイトル	No Museum, No Life?—これからの美術館事典 国立美術館コレクションによる展覧会
会期	2015年6月16日(火) — 2015年9月13日(日)
会場	東京国立近代美術館 1階企画展ギャラリー 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1
主催	独立行政法人国立美術館
共催	朝日新聞社、東京新聞、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、NHK
開館時間	10:00—17:00(金曜は20:00まで) 入館は閉館の30分前まで
休館日	月曜日(7月20日は開館)、7月21日(火)
アクセス	東京メトロ東西線「竹橋駅」1b出口より徒歩3分
観覧料	一般1,000(800)円、大学生500(400)円 * 高校生以下および18歳未満、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料 * ( )内は20名以上の団体料金。いずれも消費税込
お問い合わせ	03-5777-8600(ハローダイヤル)
ホームページ	<a href="http://www.momat.go.jp">http://www.momat.go.jp</a>
同時開催	5月26日(火) — 9月13日(日) 「MOMATコレクション」所蔵品ギャラリー(4F-2F) 「「事物」—1970年代の日本の写真と美術を考えるキーワード」ギャラリー4(2F) * 観覧料: 一般430(220)円、大学生130(70)円 * 高校生以下および18歳未満、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料 * ( )内は20名以上の団体料金。いずれも消費税込

### 【報道関係お問合せ先】

広報担当

TEL : 03-3214-2564 FAX : 03-3214-2576 e-mail : pr@momat.go.jp

No Museum, No Life?—これからの美術館事典 国立美術館コレクションによる展覧会  
広報用貸出画像一覧



1. トーマス・シュトゥールト《ルーヴル美術館 4、パリ 1989》  
1989年、タイプCプリント、138.0×177.0cm、  
京都国立近代美術館 ©Thomas Struth



2. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《横たわる浴女》  
1906年、油彩・キャンバス、54.8×65.0cm、  
国立西洋美術館



3. 森村泰昌《フェルメール研究 (3人の位置)》2005年、カラー写真、  
44.5×76.0cm、国立国際美術館  
©Morimura Yasumasa



4. アンリ・ルソー  
《第22回アンデパンダン展に参加するよう  
芸術家達を導く自由の女神》  
1905-06年、油彩・キャンバス、175.0×118.0cm、  
東京国立近代美術館



6. ダン・フレイヴィン《無題 (親愛なるマーゴ)》  
1986年、黄色蛍光灯、ピンク蛍光灯、  
244.0×41.0×20.5cm、国立国際美術館  
©Stephen Flavin / ARS, New York / JASPAR,  
Tokyo E1582



5. 岸田劉生《麗子肖像 (麗子五歳之像)》  
1918年、油彩・キャンバス、45.3×38.0cm、  
東京国立近代美術館



8. オーギュスト・ロダン《考える人》1880年、ブロンズ、  
71.5×45.0×60.0cm、国立西洋美術館 松方コレクション  
Photo : 上野則宏



7. マルセル・デュシャン《泉》1917年 (1964年、  
シュヴァルツ版 ed. 6/8)、  
小便器 (磁器)・手を加えたレディメイド、  
36.0×48.0×61.0cm、京都国立近代美術館  
©Succession Marcel Duchamp / ADAGP,  
Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1582